［二〇一四年度大会シンポジウム］特集　死者の記憶――思想史と歴史学の架橋

コメント：権力の誘惑――靖国を考える視点設定をめぐって――

樋口　浩造

「死者の記憶」を看板に行われたシンポジウムについて、この小稿では、一点だけ意見を述べて、コメンテーターの仕事とさせていただきたい。思想史学会からは佐藤弘夫氏をたて、外部から名古屋大学の羽賀祥二氏をお招きしたシンポだったが、当日も述べたように、お二人の手法は大きく異なるものの、その前提において共有するものがあったように思われた。そのことについて、私なりの意見をここでは述べておくことにする。

その前提とは、お二人とも「ヤスクニ」を受け入れる民衆的（国民的・地域的）な基盤を指摘されようとしていた点である。その前提の立て方に対して、ここでは反論を試みてみたい。一般に言われているように、神話的にはイザナギ・イザナミ以後、生者と死者の世界は分離し、仏教伝来以降は、あの世での救済が盛んに説かれるようになる。さらに江戸期には、救済論よりもむしろ現世的な生き方が焦点化する。佐藤氏のレジュメの言葉を用いると「他界に対するリアリティの縮小」が起こる。ここまでは、とても乱暴ではあるが、通説の繰り返しと考えてもらって良いだろう。

では、近代はどうなるのか、が問題であるのだが、ここでは本居宣長の発言を参照することで論を進めたい。以下は宣長の有名な発言である。

さて其よみの国は、きたなくあしき所に候へども、死ぬれば必ズゆかねばならぬことに候故に、此世に

死する程悲しきことは候はぬ也（『鈴屋答問録』）

この宣長の死生観は、極めて近代的な透徹した死生観であると考えている。確かに宣長には、顕幽論の存在のように近代性とは相容れない部分も多い。「よみの国」という死後の世界を設定しているのだから、近代人とは違うという指摘も理解できる。しかし、今そのことには深入りしない。それでも宣長のこの救いのない死後観には、生死を明確に分かつ近代人に通底する思想が存在すると考えられるし、大きく言ってしまえば、やはり宣長は、政治的（近代的）な中央集権国家の樹立に先駆けて、文化的な共同性（文化的ナショナリズム）を思想的に確立した人物だと考えるからである。

宣長は、外国の（儒学や仏教の）死後「安心」論は「無益の空論」だと指摘する。しかし、仏教については、若干異なる意味合いで論じている。「仏の道は深く人情を感動せしむるもの」というような、「人情」との関わりで仏教に言及するところが、『紫文要領』などの各所に見られるのである。救いのないことを知るのが「真実の神道の安心」と言いながら、それがなかなか「人情」とは相容れないとの認識を示すのだ。死んだらどうなるのかを知りたいのは「人情」であって、「まことに然るべきことに候」と認めるのである。そこに以下の議論が続く。

此故に、仏の道はこゝをよく見取りて造り立候物に候。されば、平生は仏を信ぜぬ者も、今はのきはに及び候ては、心細き儘にやゝもすれば彼道におもむくこと、多き物に候。これ人情のまことに然るべきことわりに候（同上）

人の心は弱い。死が迫るとき、何らかの安心がほしいのは「人情」であって、釈迦はそうした「人情」をよく心得ていたから、ありもしない極楽を語り出し、そして人々もそれを信じようとした、というのがここで整理しておきたいおおよその論点である。

ここで本題に戻ろう。思想史の通説に従えば、死後の世界と現実の世界との乖離が歴史的に徐々に進行していったことが指摘されてきた。そして現世重視の江戸期を経て、近代人は、「死んだら終わりだ」という意識を大なり小なり共有するようになる。宣長は（直接に近代人ではないけれど）、そこで仏教に「人情のまことに然るべきことわり」を見いだした。人々の心の不安に対して、（ありもしないものだと指摘しながらも）あの世を提示した仏教が、死ぬ間際の人にとっては救いであろうことに理解を示す。同様に、あの世を信じられなくなった多くの近代人もまた、死が迫るとき不安を抱くであろうことは、

容易に想像できよう。私の言いたいことは簡単だ。そこにつけ込み、誘惑・介入してきたのが靖国神社だということである。

逆に言えば、民衆（国民・地域）が「ヤスクニ」を下支えしたことは、いくらでも論証できるのではないだろうか。特定の信仰がないものにとっては、宗教的救いの可能性はない。死後の世界の存在を信じていない人が、死に直面し「わらにもすがる」その場所に、「ヤスクニ」は用意されているのである。いや多くは救いを信じてさえいなかったであろう。死が迫るとき、残されたもの達に「靖国で会おう」という言葉は、救いではなくひとかけらの慰めに過ぎなかったことは想像に難くない。こうした民衆のあり方が「ヤスクニ」と共犯関係にあることの指摘には、疑問を感じざるを得ない。それは事実かどうかの問題ではなく、研究者がどの角度から「ヤスクニ」に迫ろうとするのか、その視点設定に関わる問題である。

この問題はかつて私が、高橋哲哉の『靖国問題』（ちくま新書）を批判的に論じたこととも表裏をなしている。[1] 高橋はこの好著で、死者を追悼する悲しみを、国家が「英霊」として祀り・顕彰することによって、喜びに転化する「感情の錬金術」を「ヤスクニ」に見いだす。これは鋭い指摘だと思う。しかし、続いて高橋は、悲しみを「ヤスクニ」に譲り渡さないことの大切さを主張する。かつての批判は繰り返さないが、ここでの文脈でいえば、高橋の議論は、民衆に強くなれ、共犯関係になるなと要求する議論であると言えそうだ。つまり、高橋も現状としては、「感情の錬金術」によって、人々の感情が、「ヤスクニ」を肯定する感情へと誘われていることを指摘している。そしてそうした誘いを拒否できる「自然な感情」に立ち戻ることを主張する。しかし、人は死に対してそんなに強くなれるのだろうか。

本稿の論点に戻ろう。人は強くない。死後は不安である。いや死ぬことそのものが不安なのである。宣長は仏教を、人々の心の慰めではあるが「空論」だと、一定の理解とともに批判的に論述した。だが、宣長が相手にしているのは、宗教的救済を説く仏教である。私たちが相手にしているのは、国家神道体制下の靖国神社である。この落差を明確にしておかねばならない。国家権力は強力だ。例えば、国家が兵士に死を迫るとき、それを拒否することは非常に困難である。周囲が応召されていくときに、自分だけがそれを拒否できるであろうか。戦場に行き死の恐怖にさらされる人が不安を感じ、残されたものが悲しみの感情を抱くのは、至極まっとうなことであ

るだろう。人は死に不安を抱き、死を悲しむ存在であるが、それを利用・吸収するために、人工的に作られた権力的な装置が「ヤスクニ」であること、この本末を転倒させてはならないのではないか。

「ヤスクニ」が人々の不安を吸収し、動員し、信仰を得ていくこととは、まさに救いのない近代世界において、人々が、国家権力が仕掛けた圧倒的な威力を持つ装置に取り込まれていくことを意味している。追究すべきは、国家権力が、いかに民衆の心を動員し、巧みに操縦しようとしたのか、そのカラクリを明らかにすることではないか。あの世を信じられなくなり、死に恐怖以外のものを感じられない人々に、国家に立ち向かう強靱な個人を要請することは酷であろう。それが「ヤスクニ」を下支えするものだと指摘することが、「ヤスクニ」を考える上で有効だとは思えない。国家が死後をも管理する近代国家の問題に、私たちは正対し、「ヤスクニ」と対峙しなければならないのではないか。

こうしたことをいうために、わざわざ宣長を引くまでもなかったのかもしれない。しかし、宣長こそ、ナショナリズムの共同性も排外性も併せ持つ思想家である。私達は、宣長以降のナショナリズムを乗り越えていかねばならない時代に生きている。つまり、宣長の近代的な救いのない死生観は、宣長のナショナリズムとともに、私たちの前に立ちふさがる「近代」として立ち現れてきている。近代的な装置としての靖国神社と、問題系としての「ヤスクニ」は、近代国家が生み出した死後の管理システムとして、即ち権力の誘惑の問題として論じられるべきだと考える。

注

（1）拙稿「日本ナショナリズム批判――帝国の時代の知の可能性として」（『季刊日本思想史』71、ぺりかん社、二〇〇七年）参照。

（愛知県立大学教授）